

第1セッション総合討議

神野藤昭夫氏から、南二淑氏の発表について、和泉式部の歌も当時の女歌の影響から完全に逃れるものではなかったが、黄真伊の歌がその時代の表現の伝統とどう関係するのか、という質問があった。南二淑氏は、四季の歌や恋の歌が韓国の伝統文芸に少ないことを答えられた。

座長の今西祐一郎氏が、古典文学は個の作品として捉えられることがよくあるが、その背後に個を超えた伝統の存在があるはずだ、そういう点から金粉叔氏の発表をどう思われるかと今関敏子氏に質問された。今関氏は「近代的な自我と古典における自我とでは違いがあるのだから、二条に自我が存在しないというわけではない。ただ、二条が最初からこういう生き方を目指していたという捉え方は、古典の場合はできないのではないか。近代的自我を強調してしまうと読み誤るのではないだろうか。」と述べられた。

糸川光樹氏からエルマコワ氏に、集団の作家と個人の文学性という観点から『日本書紀』の作者についてどう考えるかという問いかけがなされ、エルマコワ氏は「『日本書紀』を翻訳する過程で、文体が途中で変わってしまわざるを得なかった。これは複数の作者の存在を暗示しているように思う。不比等と中大兄皇子のグループの存在が作者解明の手がかりになるかもしれない。いずれにしても『古事記』と『日本書紀』とでは、機能が違うのだと思う」と答えられた。

福田秀一氏から「日記文学というのは日本独特のものであるが、個の体験がなんらかの一般性を持っており、そこに広く訴えかけるものがあるものを日記文学と呼ぶというのが、日本の学会のだいたいの統一見解だと思うが、その点に対してはいかがであろう」との問いかけがなされた。これに直接応えたものではないが、金粉叔氏から、やはり自分は二条を近代的自我を持った女性として見たいとの表明がなされた。